

つまりその、なんといいましょうか、おばけというと「こわい、こわい」ばかりで、「わらえる、わらえる」というのが、ほとんどありません。

そこに焦点を当てた一篇もよかろう、とおもわれました。

たしかに怪談やって笑われるのも、作ったほう語ったほうとしては、気分がよくない。

水木しげるの描くおばけだって、親しみやすかったり莫迦莫迦しかったりするのはあっても、笑えるというものではない。

〈オバケのQちゃん〉のマンガも愉快だったが、それほど笑えるものでもなかったのは、年齢的なものかもしれないが。

それではむかしのおばけはどうかというと、『日本霊異記』のおばけは、やはり無気味だし、小泉八雲の『怪談』は面白いが、笑える面白さではありません。

日本のおばけ映画で一番こわかったのは『怪猫』シリーズと『リング（貞子）』シリーズで、外国のおばけ（あるいはスリラー）映画で一番こわかったのは『エクソシスト』とスチーブン・キング原作の映画でしたが、日本も外国も笑えるおばけ映画がない、あってもくだらないからだれも観ない。

それならば逆転の発想で、笑話を探して、それを怪談に仕立て直すという方法もかんがえられます。

そこで内外の「笑話集」をひもといてみると、笑話というよりも、艶話（つやばなし）が多い。

個人的には艶話は好きだけれども、薄汚い感じもあり、清廉な『おばけの季節』の参考とするには不似合いです。

唯一参考になりそうなのは、落語のおばけで、夏の夜の出し物をのぞくと、けっこう笑えるおばけがいます。

というわけで今回は、落語的なおばけを登場させたいとかんがえましたが、落語にでてくるおばけ「そのもの」では、作者として芸がないとおもわれるので、自分なりの創作落語、怪談であり笑話である一篇づくりを少々努力してみましようか。

とはいえ、作者が努力したものであるからといって、笑ってもらえる保証もないし、だいいち読まれる保証もないので、やっぱり努力しないで、いいかげんに書いてみます。

読者は笑わないかもしれないけれど、作者は笑って書いてみたいものです。

それがお金をもらわない原稿書きの、数少ない特権のひとつですからねえ。

どっちにしたって、期待なんかしないでくださいよ。